

# 19 世紀後半ハンガリーにおける対日認識の一考察

— Vasárnapi Újság に現れた日本観 —

近藤正憲

はじめに (問題設定と先行研究)

## 1 問題設定

1981 年の「日本と東欧の文化交流に関する国際シンポジウム」において南塚信吾は「日本とハンガリーとの文化交流は意外に太いといえる。しかし、それは両者間の政治的変化を見事に反映している。したがって、今日、その遺産をどう評価し吸収するかが大きな問題であろう。」と述べた上で日洪両国の相互認識を大まかに概説している。南塚は①第一次大戦前、②戦間期、③第二次世界大戦後 1960 年代まで、④それ以降の四つの時期に分けて夫々の特徴づけを行っており、更に①第一次大戦前の時期に関しては日露戦争を境として相互の認識が大きく変化することも指摘している<sup>1</sup>。ハンガリーの対日認識に関して言えば、日清・日露戦争以前はエキゾチックな異文化世界としてのアジアの中にある最も知られていない国としてのものであり、それ以降はロシアを打ち破った強国としてのものとまとめることができる。

しかし、19 世紀後半、特に日清・日露戦争以前におけるハンガリー人の対日認識の発展過程はさらに明らかにされる必要があると筆者は考える。なぜなら、この時期のハンガリーの対日認識は戦間期におけるツラニズムの立場に立つ極端な日本美化の基礎となったからである。またツラニズムによって政治的に美化される以前の日本についてハンガリー人がどのように認識していたのかを考察することは政治的に切迫した利害を持たない対日認識としてそれ自体大きな意味を持っているからである。

本稿はハンガリーの新聞記事から当時のハンガリー人の対日認識を探る一つの試みである。新聞記事は読者の興味関心に関して敏感な反応を示すものである。本稿では新聞記事から 19 世紀後半のハンガリー人に提供された日本に関する情報を分析し、その興味関心を分析することによってハンガリー人の対日認識の形成を見直してみたい。

## 2 先行研究と史料の選定

<sup>1</sup> 日本東欧関係研究会編『日本と東欧の文化交流に関する基礎的研究』（1981 年）56-63p

本稿においては、考察の対象史料とする新聞を『日曜新聞 Vasárnapi Újság』とした。その理由は二つある。一つは先行研究において同誌が注目されていることであり、もう一つは『日曜新聞』自体の影響力の強さである。

第一の理由の説明は以下の通りである。19世紀後半のハンガリーの対日本認識に関する先行研究として、前出の「シンポジウム」の紀要である日本東欧関係研究会編『日本と東欧の文化交流に関する基礎的研究』（1982年）があり、この中でヴィダ・ヤーノシュは「明治維新から19世紀終わりまでの時期」を一つの時期として取り上げ、この時期の日本に関する研究を以下のよう

1 ハンガリー人自身の手による最初の日本に関する著作

Hunfalvy János 「日本と日本人」『ブダペスト評論』（1869年）

英仏語の専門書から書かれたもの。日本の地理、風土、国家体制、産業や習慣、日本語についても情報を提供した。

Sámi Lajos の記事『日曜新聞』（1868年～69年）

2 ハンガリーの学術研究者による日本に関する著作

a) 1869年から1878年の間に日本を訪れた学術研究者の活動

Xántus János の訪日研究(1869年)及び著作

1869年から訪日研究を行う。日本の地図を作成。民俗学の資料を収集。帰国後日本の製紙産業に関する論文を『日曜新聞』に掲載。

Zichy Ágost(1875年頃訪日)独自の日本研究、日本の芸術研究

日本の芸術に関する世界でも最初の論文を発表。日本文化の状況に関連して「アジアの中で日本のみがヨーロッパへの接近を試みている」と指摘。

Széchenyi Béla の訪日(1878年)、美術品収集

東アジアへの学術探検旅行の中で日本も調査する。中山道を旅した最初のヨーロッパ人。

b)日本で収集されたアイヌ関係の史料

Kreitner Gusztáv (1882年)

セーチェニと日本調査にあたった。北海道にわたりアイヌと接触し、資料収集を行う。

Ponori Török Aurel (1889年)

この資料の分析・研究を行う。

3 1880年以降に日本を訪れたハンガリー人旅行者

Szemere Attila の訪日(1881年頃)

旅行者として訪日。美術品を収集する。1891年『日曜新聞』に「ミカド」と題する記事を書く。

4 ハンガリー国内における日本の美術品の展示

ブダペストで東洋美術工芸展開催(1880年)

『日曜新聞』にこの展覧会の組織者の Pulszky Károly が工芸展についての新聞記事を書く。(1880年)

5 日本とハンガリーの学術研究者による最初の協力

Jankó János のベニョフスキー<sup>2</sup>研究 (1891年頃)

日本の地名の記述について日本人研究者が協力した。

6 日本に関する社会科学的著作

Vámbéry Ármin の研究『近代教育の場における中国と日本』1895年

第二章において明治維新の成果について言及し、日本の急速な発展をその社会的・文化的要因を詳細に検討する。明治維新をアジアの歴史上最も大きな事件であるとしている。

以上から 19 世紀後半のハンガリーにおける日本研究は当初、訪日による直接の美術品・資料収集から始まり、研究が進んでいったと考えられる。1880 年代まではハンガリーにおける日本研究の蓄積期、それ以降はかなり成熟した研究が行われていったことが伺える。この流れは第一次世界大戦前まで続いた。ヴィダは第一次世界大戦前ハンガリーにおける日本研究について「東ヨーロッパで知られていた日本に関する平均的知識と比べれば非常に重要な成果を挙げていた。」と評価している。しかし、同時に「個々の人間の個人的なイニシアティブに基づいてなされた」とその限界も指摘している。

上記論文中、『日曜新聞』に注目しながら読み直してみると、次のようなことが判明する。① 1 で Sámí Lajos の記事が注目されるものとして引用されている。② 2 の a では同誌上に掲載された Xántus János の論文「工業史の観点から見た日本」という論文が『日曜新聞』に掲載されている。③ Zichy Ágost の著作についての紹介が『日曜新聞』でなされている。④ブダペストの東洋工芸展の記事が『日曜新聞』でなされている。⑤19 世紀後半ハンガリーの定期刊行物の中で日本に関する記事を長期に渡って取り上げた出版物は先行研究を見る限り『日曜新聞』のみである。以上の四点から『日曜新聞』はハンガリーにおける対日認識の形成の上で大きな役割を果たした重要なメディアの一つであったと考えられる。

また第二の理由は『日曜新聞』のハンガリー出版業史における位置付けからである。Németh G.

---

<sup>2</sup> ベニョフスキー・モーリツ Benyovszky Móric(1746~86)のこと。ハンガリー生まれのスロバキア系軍人で冒険家、オーストリア陸軍に勤務 1768~69 年のポーランドの武装蜂起に参加してロシア軍の捕虜となり、カムチャツカに流刑となる。71 年この地で政治流刑者を中核とする反乱を組織し、官船を奪って脱走。途中、食料・水の補給のため、日本の阿波と奄美大島に立ち寄りロシアの南下を警告する「ハンペンゴロウの書簡」を長崎のオランダ商館宛てに送った。後にフランスに到着の後、同国政府を説いてマダガスカルに遠征したが失敗。85 年にはイギリス、アメリカの資本と組んで再びマダガスカルに遠征したが、フランス軍と衝突して戦死した。『東欧を知る辞典』462 頁 (1993 年) 平凡社

Béla, Kosár Domokos 編による『ハンガリー出版物史 Magyar Sajtó Története』によると、ハンガリーでは 1850 年代中葉から政治のみならず様々な専門分野に関する記事を掲載した出版物が出版されるようになったとされている。『日曜新聞』は 1854 年創刊の週刊新聞で 1860～70 年代においては最も人気のある定期出版物の一つであり、図版を多く取り入れた編集が人気を集めたものと考えられる。特に注目を集めたのはその教養関連の記事であった。政治、経済、社会、異文化等多岐にわたる話題を提供し、50 年代を通じて七千から一万の購読者数を持っていた。この購読者数はコッシュートの Pesti Hírlap よりも多く、当時としては最もよく読まれた出版物であったとされている。以上から『日曜新聞』は様々な階層の読者を持った人気のある週刊新聞であった。

以上から日本に関係する情報を広く提供した最大のメディアが『日曜新聞』であったと筆者は考える。『日曜新聞』の日本関係記事を表にまとめたものが参考資料 1 である。本稿ではこの『日曜新聞』の記事を追跡し、その興味関心を分析することによってハンガリー人の対日本認識の形成を見直してみたい。行論中第一章では『日曜新聞』の日本関係記事の傾向を時期ごとに概説し、第二章では記事の作成過程を検証する。また第三章では日露戦争期のハンガリーでの世論と 19 世紀後半の対日認識の連続性を検討するものとする。

## 第1章 『日曜新聞』に見られる対日認識

まず日本に関する情報源について考えてみると次のように言うことができる。『日曜新聞』日本関係記事の情報源は主としてイギリス、アメリカなど外国人の見聞を元にしたリポートが中心である。ハンガリー人自らが書いた記事もあるがその殆どが外国人の情報をもとにしたものであり、それをハンガリー風に味付けしたものである。参考資料 1 で\*印のついている記事がハンガリー人の手によるものと考えられるものである。明治維新以前のはすべて外国の記事の翻訳であり、明治維新以後の記事についても、シャーミ・ラヨシュの記事は後述のようにスイス人の情報に基づいて書かれている。これらのものを差引けばハンガリー人が独自の視点で書いた記事がかなり少ないことが分かるだろう。この事実はハンガリーの日本認識が情報の上で他のヨーロッパ諸国に依存していたことを示す。1868 年のブダペストでの日本人曲芸団の興行に関する記事はハンガリー人の直接の日本文化紹介として貴重であるが、例外であると言ってよい<sup>3</sup>。『日曜新聞』の中で取り上げられた記事の多くは 1890 年代にいたるまで外国での報道に依拠しているのである。

---

<sup>3</sup> 1868 年 1 月 12 日号に日本の曲芸団がブダペストの人民劇場 (Népszínház) で興行したことが報道されている。足芸、傘芸、梯子を使った軽業のリポートが掲載され、最後に記者は「実に珍しく一見の価値がある。」として絶賛している。日本が通商条約締結国への渡航を許可したのは 1866 年であり、この時多くの軽業師たちが欧米に渡ったとされている。1868 年に日本人の曲芸団の一座がブダペストにいたとしても決して不自然ではない。日曜新聞紙上記されている人名、上演された芸の種類から彼らが日本人である可能性が高いと思われる。彼らがハンガリーを訪問した初めての日本人であると考えられる。

次に日本についてどのような点を取り上げているかを見てみたい。参考資料 1 を見るとその大部分が日本人の文化に対する興味関心から書かれていることが分かる。特に開国以後 1880 年代まではその傾向が顕著であり、当時のハンガリー人の日本に対する興味関心の傾向の特徴ということができる。

さらに参考資料 1 を見ると、二つの時期に日本関係の記事の掲載が集中している事が分かる。一つは 1868 年から 1869 年の間であり、もう一つは 1874 年から 1875 年の間である。前者は明治維新に触発されたものと考えられ、後者は 1873 年のウィーン万博を一つの契機として日本に対する関心が増幅されたものと考えられる<sup>4</sup>。さらに 1890 年代にはもう一つの小さな山がある。後述するようにこの時期は日本の国会開設を契機に近代国家としての日本に関心が生じた時期であり、対日認識が大きく転換した時期でもある。

以上から 19 世紀後半における『日曜新聞』の記事の傾向は年代別に以下のようにまとめることができる。

#### 1) 1854 年から 1867 年まで

1854 年の日米和親条約の締結はハンガリー人にとって未知の島国がヨーロッパ人に開かれた事件として捉えられた。『日曜新聞』が取り上げた最初の日本の絵は 1858 年 12 月 12 日号に掲載された下田の母子の絵である。同記事の冒頭、次のように記述されている。「中国とその近くに位置する日本はヨーロッパの商業前に開かれた。この事は商業史のみならず人類の芸術史のなかで特筆すべき事項である。<sup>5</sup>」列強の商人にとっては大きなビジネスチャンスであった日本についてこの記事では、日本で生産される幾つかの産物についての記述はあるが、その商業面での利益等に主たる関心を寄せているわけではない。むしろ非常に小さな扱いをしていると言ってよい。日本との貿易について記述されている部分はわずか 1 箇所である<sup>6</sup>。それと比べると文化についての記述が多く、特に日本の建物や日本人の風俗に関心が集中している。

明治維新以前、ハンガリー人が得ていた日本に関する情報は少なく、前述の通り記事の多くは外国からの情報をハンガリー語に訳して報道している。外国人と日本人の接触の事実をストーリーとしてまとめたものが多く、内容は日本滞在中の外国人の体験や見聞をもとにしたものである。また、記事は条約締結や幕府使節の訪欧などある事件を契機として記述されているが、その事件

---

<sup>4</sup> 明治維新が日本に関する興味を喚起したことはヴィダも指摘している。日本東欧関係研究会編『日本と東欧の文化交流に関する基礎的研究』65p. (1982 年) またウィーン万博が関心を喚起した点に関してはシャーミ自身が 1875 年の『日曜新聞』の「日本今昔」シリーズを掲載するにあたって、この点を指摘している。Sámi Lajos 'Japán hajdán és most', "Vasárnapi Újság" 1875 年 8 月 29 日号

<sup>5</sup> 'Néhány szó Japánról' "Vasárnapi Újság" 1858 年 12 月 12 日号

<sup>6</sup> 日本においては金銀の価値体系がヨーロッパと違うためヨーロッパ商人が大きな利益を上げていることが記述されている。'Néhány szó Japánról' "Vasárnapi Újság" 1858 年 12 月 12 日号

自体を記した部分よりも未知の日本の文化に言及した部分の方が量的に多い点が注目される。

この時期の外国人の記述には早くから日本人と中国人を区別し、日本人に対してどちらかといえば好意的な記述を行っている記事が目立つ。イギリス人の手記を元にしたと思われる 1859 年の記事では日本と中国を「全くの対照的存在」と断じ、日本人がヨーロッパの技術を積極的に学ぶ姿勢を非常に高く評価し、次のように記述している。「日本は中国の全く正反対の例といっていいほどである。中国は古さの中で苦しみ、日本は進歩の道を見せている。(中略)清潔さは日本人の最も尊ぶものである。日本は正に悪しき昔を良い新しさと取り替えることにやぶさかでない。長崎では既に鉄道や汽車のために機械を作っているほどである。」<sup>7)</sup>

しかし、この時期の記事は数年に一回というペースで書かれたもので、頻度の上からも日本の情報が多くの人の関心を引いていたとはいえないと筆者は考える。

## 2) 1868 年から 1875 年まで

明治維新もヨーロッパでは大きな政治的事件として受け止められ、多くの新聞記事が日本に関する記事を取り上げた。ハンガリーでも多くの人々の関心を引いたようであるが、ハンガリーにおいてこの政治的事件は、むしろ日本の文化への関心を喚起する重要な契機になった。

この時期の『日曜新聞』における日本に関する記述はそれ以前と比べてかなり多い。イギリス人外交官ミルフォードの「忠臣蔵」が早くも 1871 年に紹介されており<sup>8)</sup>、クサーントゥシュ・ヤーノシュ (Xántus János) による初めての日本に関する論文も『日曜新聞』中に発表されている<sup>9)</sup>。

中でもシャーミ・ラヨシュの特集記事は注目する必要がある。明治維新までの他の記事が欧米諸国の訪問者の非常に限られた側面を報告したものの翻訳であるのに対し、彼の記事はシリーズもので様々な日本の文化的側面を取り上げており、なおかつ、かなりの蓄積の中から独自の選択を行った形跡があるのである。ヴィダはシャーミについて「ハンガリーの読者に日本についての情報を最初に提供した人物」としてその名を挙げている。参考資料 1 を見ても、1860 年代から 70 年代にかけてシャーミの記事の占める割合が非常に大きいことは一見して明らかである。シャーミの記事に関しては次章で更に検討を加えたい。

この時期からハンガリー人の手によるとみられる記事が掲載されるようになる。外国の翻訳記事の中では日本人と中国人の違いを際立たせようとする傾向があるのに対してハンガリー人の記事はむしろ「モンゴル種 mongol faj」として同一視する傾向が見られる<sup>10)</sup>。この点が両者の大きな

<sup>7)</sup> 'Képek Japánból' "Vasárnapi Újság" 1859 年 4 月 3 日号

<sup>8)</sup> 'A negyvenhét ronin' "Vasárnapi Újság" 1871 年 10 月 22 日号、29 日号、11 月 5 日号

<sup>9)</sup> Xántus János 'Japánról ipartörténeti szempontjáról' "Vasárnapi Újság" 1874 年 5 月 15 日号、22 日号、29 日号

<sup>10)</sup> 'A japáni Sárkány-társaság mutatóvanyai' "Vasárnapi Újság" 1868 年 1 月 12 日号 日本の曲技団の興行取材した記事の中で軽業師たちについて「彼ら『モンゴル種』、特に日本人と中国人は我々より忍耐力がある。」と記している。この場合の「我々」とはハンガリー人を含めたヨーロッパ

違いであるが、開国直後の記述と同様好意的な視点を持って日本を見ている点が注目される。

1870年代後半、『日曜新聞』には日本関係の記事が姿を消す。この時期はハンガリー人研究者が日本を直接訪れ、研究資料や美術品を収集した時期であるが、ウィーン万博以来、一般の読者の目を日本に向けさせる契機となる出来事がなかったのが原因であると考えられる。19世紀後半のハンガリー人にとって日本を注目する場合に、政治的な事件や博覧会など何かの契機が必要であったことは確かであると筆者は考える。

### 3) 1890年代

この時期にはハンガリー人の日本に対する視点が大きく変わってくることに注目する必要がある。1891年1月25日号の「日本の帝国議会開設」に関する記事では日本の急速な「市民社会化 (polgársodás)」の象徴としてこの国会開設を捉えている。この記事自体はハンガリー人の筆によるものではないが、首都の名称の変化、二院制の議会のヨーロッパ調の建物と内装、議員の服装が洋服であること、ヨーロッパ式の軍服を着た天皇が議会の開会を宣言する様子などを取り上げて伝えている。また主権者として天皇が大きな権力を持っていることも伝えている。この記事の中では日本人の生活文化に言及しているところは殆どない。そしてエキゾチックな異文化世界の人々とは違う明治期の日本人の姿を報道しているのである。「今日では既にヨーロッパ人もこの島国に住んでおり、日本人自身もより頻繁に欧米を訪問している。その独特の体型、特にその細い目にもかかわらず、彼らの大部分は自らをエキゾチックな人々としてでなく、私たち(ヨーロッパ)の一員として見てくれるように十分用意してから来るのである。」そして最後に「アジアの島国のこの新しい時代は非常に美しい印とともに始まり、議会の生活も熱中と成熟にふさわしく永遠のものであれという彼らの希望は確かなものである。」という言葉で終わっている。この記事では、日本人の西欧化のプロセスを肯定的に評価していると筆者は考える。

またセメレ・アッティラ (Szemere Attila) の「ミカド (Mikadó)」と題する1891年の記事はハンガリー人の対日認識の大きな転換を物語るものである。この中でセメレは神武天皇以来の「日本史」を記述する前に次のように述べている。「子どもの頃、地理の時間にはこう習ったものだ。つまり日本には二人の支配者がいて、一人は『タイクン』ないしは『ショーグン』で実際上の支配者であり、もう一人が精神的な指導者『ミカド』で、ローマ教皇のようなものであると。そして中学校で習った知識を忘れていないと鼻にかける連中に限って、今になっても日本では二重の支配体制が存在するなどと言う批判を声高に叫ぶのだ。しかし、実際そんなものは存在しなかったし、今の日本に関しては全く事実と反する。」セメレは明治天皇を高く評価し、数百の小国を統一し、国内に鉄道を敷設し、日本始まって以来の大改革を行った人物として位置づけている<sup>11</sup>。

1894年、フェルディナンド皇太子の訪日に際して同行したハンガリー人海軍士官が投稿した記事を2月から3月まで5回にわたって『日曜新聞』に掲載している。この海軍士官は明治天皇が

---

人の意であると考えられる。

<sup>11</sup> Szemere Attila 'Mikadó' "Vasárnapi Újság" 1891年6月7日号

日本の近代化に着手した経緯を概説し、国の統一を成し遂げた点を高く評価している。この点はセメレと共通する。また日本の訪問地毎にその風景を解説し、その地にまつわる物語を記述している。彼の記述の中では当時の日本を表わすハンガリー語 *Japán* の代わりに *Nippon* を多用していることが注目される。この表現は後のツラニストたちが日本に対する好意を殊更強調する場合に頻繁に使われる用語でもあるが、ここではその意味で使っているわけではない。ただ単に日本語の単語を得意げに用いているだけである。

1890年代の対日認識はそれ以前と比べて視点の定まる対象物こそ変わってきたが、一貫して日本をネガティブに捉えていないという点である。ヨーロッパの制度・文化を急速に吸収し、自らを変貌させていく日本の近代化はハンガリー人に驚きの目を持って迎えられたが、そこに反発や危機感は存在しない。むしろヨーロッパに接近しようとする日本を見守る視点があることが注目される。また、この時期においても日本人をハンガリー人の同族とみる視点は『日曜新聞』に存在しない。

またもう一つ注目される点がある。日本に関する知識がかなり広まったと考えられるこの頃、『日曜新聞』はアイヌ、朝鮮に関する記事を掲載しているという点である。これはハンガリー人の関心を引く地域が日本の周辺部、隣国へと移動していったことを物語る。そしてアイヌに関しては皇太子の訪日に関連して書かれており<sup>12</sup>、朝鮮に関しては日清戦争を前に両国の争奪的となりつつあった事と、アジアにおけるロシアとイギリスの間の利権対立がヨーロッパの状況に影響を与えうる状況の中で朝鮮がロシアの隣国であるという問題意識に基づいて書かれている<sup>13</sup>。自分たちに関連のある何らかの契機はアジアに関心を向ける上で必要であったことがわかる。

以上、『日曜新聞』で看取される対日認識をまとめると次の二点に特徴づけられるであろう。一つは何らかの事件や博覧会などが日本に関する興味を喚起し、それが契機となって記事にまとめられ読者に提供されるという過程が常に存在したという点である。この事実は反面、そのような契機がない場合には数年間にわたって日本は見向きもされない存在であったということでもあった。セメレ・アッティラが述べているように、ある人々の中には日本の幕末のイメージがそのまま現在の事実として残存し続けていたのであり、一般のハンガリー人にとって日本はそれほど遠い存在であったことも事実である。

もう一つの特徴は日本に対する視点が非常に好意的なもの、或いは現状肯定的なものばかりであるという点である。この傾向は外国の翻訳記事にもハンガリー人の手による記事にも共通して

---

<sup>12</sup> 'Az ajnók' "Vasárnapi Újság" 1894年2月18日号アイヌは「半開民で世界の事件が影響を与えることのない」人々として描かれており、体の特徴は毛深く、漁業を生業とし、数を五つまでしか数えられず、自らの年齢もこたえられない未開民という認識が見られる。この記事の最後には「いずれ北海道には日本の開化した都市が作られることになるだろう。(ヨーロッパの)ジプシーにおける音楽家たちのように、アイヌたちも何等かの形で今日の時代精神の思考に沿うことをしなければ、彼らは姿を消してしまうであろう。」と書かれている。

<sup>13</sup> 'A koreai zavarok' "Vasárnapi Újság" 1894年7月22日号

いる。日本を「野蛮なアジアの国」とする偏見は『日曜新聞』中に見ることができない。この理由は二つ考えられる。一つは外国からの情報自体に日本に好意的なものが多かった点である。横山俊夫は19世紀中葉のイギリスで第一次アヘン戦争後、ケンペル以来の好意的日本観が中国人嫌悪と反比例する形で強化されていったと指摘している<sup>14</sup>。このイギリスでの傾向がハンガリーへも影響を与えたことは十分考えられる。もう一つの理由は、『日曜新聞』が多くの読者を持つ教養雑誌であり、その中の異国の文化紹介欄において日本が取り上げられたことが考えられる。19世紀の後半は旅行の大衆化の時代でもある。中産階級に属する読者にとって魅力的な題材として日本を描こうとした結果、掲載段階でマイナスの情報を少なくするよう配慮が為されたと筆者は推測する。

ここで事実として重要なことは『日曜新聞』という人気のある出版物、換言すれば力のあるメディアにある種の好意的な視点を持った日本関係記事が掲載され続けたことであり、この視点がハンガリー人の対日認識に大きな影響を与えたと考えられる点である。

ではこのような記事がどのように作られたのであろうか。次章においてはシャーミ・ラヨシュの記事から日曜新聞の記事の作成過程を検討したい。

## 第2章 『日曜新聞』日本関係記事の作成過程

前述のように、『日曜新聞』の情報源は殆どが外国人の見聞による間接的情報である。したがってハンガリー人の対日認識を分析する上で重要なのは『日曜新聞』がどのような情報を選択し、どのような立場で読者に提供していたかである。本稿ではシャーミ・ラヨシュの記事を中心にこの点を考えてみたい。

### 1) シャーミ・ラヨシュの記事の情報源

ヴィダによればシャーミ・ラヨシュは1865年から『日曜新聞』の常勤記者で1868年からはハンガリー大蔵省、その後は公共事業・運輸省に勤めていた人物である<sup>15</sup>。参考資料1に見るように彼の日本関係の記事は1868年4月から始まり、その後9月、10月、12月に彼の日本関係の記事が掲載されている。そして1869年5月に『日曜新聞』では3週間にわたった日本特集を組むことになった。この事実は前年の日本関係記事がかなり好評であったためであると筆者は推測する。

さらに1875年、シャーミは再び「日本今昔 (Japán hajdán és most)」と題するシリーズを8月から11月まで担当している。最初の記事の中でシャーミはウィーンの万国博覧会で日本の産品が注目を集めたことを述べ、日本の開国にいたる歴史を簡単に説明した後、次のように記述している。

---

<sup>14</sup> 横山俊夫「ヨーロッパに伝わった不思議の国」『朝日百科日本の歴史8近世II』1989年 朝日新聞社

<sup>15</sup> 日本東欧関係研究会編『日本と東欧の文化交流に関する基礎的研究』（1981年）66p.

「日本はヨーロッパの民が打ち建てた国家を除けば、この地球上で最も開化した国と見ることができ、高いレベルの伝統ある市民性(polgársultság)は次のような衝撃的な諸側面を明らかにしている。すなわち、驚異的に発展した彼らの産業が生み出した商品が既に中世の頃から当時の文明世界に入り込んでいたということである。件の顛末(日本の開国のこと一筆者)は今日のヨーロッパやアメリカなどの工業と商業が発展した諸国民の例を見ても、小さからぬ意味を持っている事が分かるだろう。<sup>16)</sup>」また同じ文章の中で日本人を「東洋のフランス人」と呼んでいる。この部分はシャーミの対日認識をよく表している。

ではシャーミの知識はどこから得たものなのであろうか。シャーミに訪日経験はなく、図版入り長文の記事をどのように書いていたのであろうか。筆者の調査の結果、情報源はスイス人エーム・アンベール Aimè Humbert の著作であることが判明した。

アンベールは修好通商条約を締結する目的で来日したスイスの全権代表である。1863年4月から1864年2月まで日本に滞在し、『世界一周 (Le Tour du Monde)』誌に「日本(Le Japon)」と題する記事を掲げ、1870年にはパリで『日本絵図『Le Japon Illustré』』という著作を出版している<sup>17)</sup>。シャーミは恐らく『世界一周』誌に掲載された図版と記事を転用してこの記事を書いたものと思われる。『日本絵図』の邦語訳『幕末日本絵図』を参照すると、シャーミがアンベールの記述の中から多くの部分を引用し、挿し絵についてはほぼ100%依存している事が分かる。

アンベールの著作を日本語訳した高橋邦太郎は「今日の目から見れば、異種の文化をいかに努力して理解しようとしているかに微笑まれると共に、暖かい、人間味豊かな心情を持って、日本人に接する彼の<sup>ひととなり</sup>為人に好感を禁じ得ない。<sup>18)</sup>」とアンベールを評価している。

しかしアンベールは当時の日本の問題点も度々指摘している。アンベールの著作は当時の日本の封建制度に批判的な見方を一貫して持っており、仏教寺院の僧侶に対する批判も数箇所に見られる。また攘夷浪士の活動による治安の悪さや幕府の役人の外国人に対する非能率的な対応など日本に関するネガティブな情報も多く含まれている。シャーミの記事の中にそのような部分は殆ど見られない。シャーミはどのようにアンベールの著作から記事を作っていたのだろうか。次にこの点を検討したい。

## 2) アンベールとシャーミの比較

アンベールの著作の中からシャーミがどのように記事を作っているかを1869年5月2日号「日本の武器とヒーロー『義経』」を例に考えてみたい。シャーミは日本の武器についてまだ近代化されていない装備から筆をおこし、一方で世代、性別に関わらず武器として使われている弓矢と意外な武器としての軍扇に注目している。そして軍扇の扱いの名手として源義経を挙げ、義経が

<sup>16)</sup> Sámí Lajos 'Japán hajdán és most -' "Vasárnapi Újság" 1875年8月29日号

<sup>17)</sup> 高橋邦太郎訳『アンベール幕末日本絵図』雄松堂(1978年)上巻1p.

<sup>18)</sup> 高橋邦太郎訳『アンベール幕末日本絵図』雄松堂(1978年)上巻1~2p.

小柄で背の低い人物であり、日本人の画家が義経を橋の欄干に立った姿でよく描くことを記述して記事を終えている。

しかし日本人の武器について記述したものとして日本刀についての記述が無いのは不自然とはいえないか。この部分に相当するアンベールの記述を参照すると、原典ではその直後に以下のような記述が続く事が分かる。

「日本の貴族が惜しげもなく金を投じ、それを誇りとするのは武器で、特に刀剣については、鍛え方はたぐいなく優れ、一般的に柄や鞘には、彫金や象眼でこのうえなく精緻な装飾が施されている。だが主に刀剣の値打ちは、旧家に伝わったことと、たてた武功によって決まるのであって、どの刀剣でも、古い家柄の大名には、由来や、伝統や歴史があり、その価値は、その刀がどれだけ戦場で血を流したかによるのである。新しく買い求めた刀は、買った人の手に、いつまでも処女でいるわけにはいかなくなっている。刀の所有者となった武士は、人間の血に投げ入れる機会を待って、それを生きた動物か、できたら、死刑囚の死体で試し斬りする。上司の許可を受けて、死刑執行人から引き渡された死体を、邸の庭で十字架にかけるとか、木馬に縛り付け、刀で切り刻んだり、たちわったり、一刀両断して腕前を試したり、二つの死体を結び付けておいて、胴の真中を一太刀で見事にたちわる技を身につけるのである。<sup>19)</sup>」

日本刀について記述をしなかったのはこの様な部分を避けたかったのではないかと筆者は想像する。

次に「医師階級」について見てみたい。この部分はアンベールの著作中下巻最初のテーマとなっている。シャーミは『日曜新聞』で日本の中にも多くの医師が存在し、特に大都市には多いこと、また御典医から町医者まで医師の中にも階級が存在することを述べ、さらに医師の服装が威厳のある事、また低い階級の医師たちも報酬を度外視した医師の活動故に衆人の尊敬を受けていることを述べている。そして最後に医師の自己犠牲や学問への貢献から医師の組合は数百年の間この国に存在し続けていると結んでいる。

この記事で見る限り日本の医師は非常に理想化されたすばらしい存在といえるだろう。しかしアンベールの原著と比較すると原典では真中に存在していた一つの段落が完全に欠落していることに気づく。その段落は、日本では医師の開業には特別な試験が無いこと、そして漢方と蘭方といったように全体として統一し、確立された治療法や医師養成の組織が存在しないことを指摘しており、さらに次のように論を進めている。

いずれにしても、国民は改革を全然要求してはいないのである。彼らに必要なのは、自分の自由になる医者が大勢いることであり、…(中略)…結局、いってみれば、医術を修めた人の中に、親切で、病人の考えに逆らわないように気を配り、信頼されようと汲々としている召し使いの姿を見たいのである。彼ら(医師たちのこと一筆者)の職業はこの様な信頼でもっているようなものである。この彼らの最後の役割が公衆に尊敬の念を起こさせる、ある種

<sup>19)</sup> 高橋邦太郎訳『アンベール幕末日本絵図』雄松堂(1978年) 下巻 299～300p.

の態度を彼らに強要し、彼らを社会の他の階級と区別させているのである。<sup>20)</sup>

これはアンベールの非常に鋭い観察眼から引き出された重要な部分である。この段落の欠如は恐らくアンベールの記述のニュアンスを完全に変えてしまうほどの意味を持っている。チャーミがアンベールの著作の中から意図的に残酷なもの、ネガティブな情報を避けて記事を作っていたことは間違いないと筆者は考える。この様に美化された「日本」は正に異文化のユートピアとしてハンガリー人読者が求めたものであり、『日曜新聞』はそれを提供したのである。そしてそのようなユートピアを可能にしたのは地理的な遠隔性に基づく情報の少なさであった。

『日曜新聞』というハンガリー人の有力なメディアが日本に関して、限られた情報の中の更にポジティブに特化した情報を提供していたことは明らかであり、この視点は知識人が日本を見つける基礎となり、同様な視点から日本の近代化を捉え続けていったという点は重要である。19世紀後半に培われた対日認識は日露戦争の時期に反露意識と結合して日本に対する同情を強める役割を果たしたと筆者は考える。次章ではこの対日認識と日露戦争期ハンガリーにおける親日的世論形成との関連について考察を加えたい。

### 第3章 好意的対日認識の定着

1896年から1905年までウィーン駐在日本公使を勤めた牧野伸頭は『回顧録』の中で、日露戦争に際してハンガリー人が日本に対する同情の念を強く示したと記述している<sup>21)</sup>。20世紀初頭のハンガリーでのこの様な動きは19世紀後半の対日認識とどのような関係にあるのだろうか。

これまで日本における研究の中では日露戦争期ハンガリーの親日的世論について深い検討が為されておらず、ハンガリー人が自らをアジア起源の民族として意識していたことがその理由の一つであるとされる場合が多かった。ペーター・パンツァーは1980年のシンポジウムにおいて日露戦争中ハンガリー人が日本を支持した理由について「(ハンガリー人に他のヨーロッパの諸民族に対する)言語的疎外感があったこと、及びその発祥の地中央アジアに対する憧憬の念からも、日本に対し同類意識があった為<sup>22)</sup>」と述べている。また稲野強はヴァームベリ・アールミンの研究の中でパンツァーの説を根拠に日露戦争期のハンガリー人の親日性を彼らの言語的疎外感とアジア起源に基づく親近感に求めている<sup>23)</sup>。しかし、これまで見てきたように19世紀後半のハンガリーにはアジアの同族としての対日認識は殆ど見ることができないのである。

ハンガリーの親日的世論を支えたものは何か。この点についてはセルダヘイ・イシュトヴァーンが考察している。セルダヘイは日露戦争期のハンガリー人世論を扱った論文中、バルカン問題

<sup>20)</sup> 高橋邦太郎訳『アンベール幕末日本絵図』雄松堂(1978年) 下巻17~18p.

<sup>21)</sup> 牧野伸頭『回顧録』(上)269p、283p 中公文庫(1977年)

<sup>22)</sup> ペーター・パンツァー「オーストリアにおける日本像」日本東欧関係研究会編『日本と東欧の文化交流に関する基礎的研究』(1981年)124p.

<sup>23)</sup> 稲野強「牧野伸頭と日露戦争(二)」『群馬県立女子大学紀要』第10号41p.(1990年)及び「『反露主義者』アールミン・ヴァームベリ」山本俊朗『スラヴ世界とその周辺』ナウカ(1992年)

をめぐって対露協調政策を進めるオーストリア=ハンガリー帝国の外交政策がハンガリー国会において問題とされた際に表明された政府与党と野党の対日認識を新聞記事から分析している。セルダヘイによると、政府側が日本の大国化をヨーロッパ人のアジアにおける優位を脅かす存在として認識しているのに対して、野党側は専制ロシアに対して立ち上がったアジアの小国として認識しているのである。セルダヘイはこの論争の背景にハンガリー人の 48 年革命以来の反露的気風とハンガリー民族主義の台頭が日本に対する同情を喚起し、その際に「専制ロシアと立憲制日本」という対立図式の中で知識人層の多くが日本に同情的立場を示したと指摘している<sup>24</sup>。セルダヘイは「反露」的なハンガリー民族主義が「親日」的な世論を生んだという見方をしているが、一方で次のように述べている。「ハンガリーの解放戦争を阻害したロシアよりも、殆ど知られていないアジアの小民族がより人気があったことは驚くに値しないが、最近まで封建制の閉塞状態の下にあった、ヨーロッパから遠くに存在する一民族が非ヨーロッパ的な文化的、経済的そして政治的伝統をもつ国々の間で軍事大国として国際政治の舞台に立っていることにアナリストたちが意見を表明しなかったことは全く驚きである。<sup>25</sup>」

筆者はこの点に関して、近代国家としての日本の姿が日露戦争当時にはハンガリーで既に広く受け入れられた一般的な知識として定着していたと主張したい。日露戦争期ハンガリーにおける日本への同情的世論は第一義的に反露的気風、ハンガリー人の民族主義の現れとして捉えるべきであることは筆者も同感である。しかし、その際に 19 世紀後半に形成された好意的な対日認識がヨーロッパ的な価値観に沿う日本像を用意し、ハンガリー人の親日的世論を支えたのではないだろうか。日露戦争期は所謂「黄禍論」が宣伝された時期であるが、中国や太平洋に利権を持つ他の列強とは違い、スラヴとゲルマンの狭間で幾多の試練を味わってきたハンガリー人には黄禍論よりもロシアの脅威の方がはるかに切実であり、現実的であった。一方 1890 年代以来、日本は立憲制を採用した近代国家として一般に知られていた。この様な状況のもとで一般的な知識としての近代国家日本について非ヨーロッパ文化に対する警戒感から評論を差し挟むことは当時のアナリストたちにとって黄禍論を振りかざすに近い一種のアナクロニズムであったのではないかと筆者は考えるのである。

## 結論

19 世紀後半におけるハンガリー人一般の対日認識は概して好意的なもので、日本の文化に対する興味関心から醸成されていったと考えられる。情報源の多くは他のヨーロッパ諸国における日本研究の成果と旅行者の見聞の情報によっていたが、1880 年代以降ハンガリー人の直接の情報も入るようになった。

---

<sup>24</sup> Szerdahely István 'Az orosz - japán háború és magyar politikai közvélemény' „Japán - kutatás Magyarországon Múlt és Jelen” Budapest 1996

<sup>25</sup> Szerdahely István 'Az orosz - japán háború és magyar politikai közvélemény' „Japán - kutatás Magyarországon Múlt és Jelen” Budapest 1996

19 世紀後半のハンガリー人は自らが属するヨーロッパ文化とは全く異なるエキゾチックな別世界の人々として日本人を認識しており、この認識が、「ヨーロッパ的価値観の上で好ましい近代化を進める日本」という認識に大きく変更されるのは 1890 年代以降である。そしてこの認識は広く定着し、日露戦争で更に強められたと考えられる。

19 世紀後半におけるハンガリー人の好意的対日認識の中には、戦間期に支配的となるツラニズムの影響を見出すことはできない。これは日露戦争期についても同様である。

日露戦争を契機としてハンガリー人が持った同情的(そして後に賞賛的)な態度は自らに深い関連性のある政治的な事件を契機とした初めての対日認識であったとすることができる。それは同時にロシアという巨大な隣人を前提とした上での初めての政治的対日認識であったということもできるだろう。「近代的国家としての日本」、そして「ロシアを打ち破った強国としての日本」というイメージは日露戦争後、第二次世界大戦の終結まで一貫してハンガリー人の対日認識を支配したもののなのである。

最後に同時期の日本の対ハンガリー認識について述べたい。19 世紀後半のハンガリー人の対日認識と比べると、同時代の日本人の対ハンガリー認識はかなり対照的である。久米邦武『米欧回覧実記』であらわれたハンガリーは日本と共通する面を多く持つ遅れた小国としてのものであり<sup>26</sup>、東海散士『佳人の奇遇』では同じ弱小民族の一つとして列強と対決するために同盟を結ぶ相手であった。日本人は植民地化の恐れを常に根底に持っており、文化的な興味関心は殆どなく、政治・経済的な関心が主であった。換言すれば日本人は他のヨーロッパ列強に対してと同様に一貫してハンガリーを政治的に見ていたのであり、文化的な関心は無視し得るほど小さく、全く副次的なものであったとすることができる。これは両国の置かれた政治的な状況の格差をそのまま反映しているといえるだろう。

20 世紀に入ってこの格差は完全に逆転する。日本はアジアの小国から覇権を争う軍事大国となり、ハンガリーはヨーロッパの大帝国の支配的地位を与えられた民族から周囲を敵対的な国に囲まれた小国へと転落する。政治的な親日意識がツラニズムという特殊な民族主義に包摂され、1930 年代の孤立した日本との文化協定政策へとつながっている。このプロセスは、政治的関心に支配され続けてきた日洪両国民の相互認識の反映とすることができるのである。

---

<sup>26</sup> 久米邦武『特命全権大使 米欧回覧実記』(四) 第 81 卷「維納府ノ記 附匈加利国ノ略説」406p 岩波文庫 (1980 年)

参考資料 1

『日曜新聞』記事の一覧 (1954年から1994年まで)

年月日	記事見出し	記事内容	興味関心
1854/07/02	Az Amerikaiak Japánban.	ペリー来航について	政治
1857/05/31	A Dairi vagy a japáni uralkodó papfőnök	天皇について	文化
1858/12/12	Néhány szó Japánról	日本の町並みや日本人の生活について	文化・社会
1859/04/03	Képek Japánból	日本と中国との対比	
1862/07/06	Japáni Követség Európában	幕府の遣欧使節について	政治・文化
1868/01/19 *	A japáni sarkány társaság mutatvány	ブダペストでの日本人曲芸団の興行について	文化
1868/04/12 *	Japáni zarándokok	「お遍路」について Sámi Lajos	文化
1868/09/20 *	Nippon hídjá Yedoban	日本橋近辺について Sámi Lajos	文化
1868/10/04 *	A japánok társadalmi életéből	日本人の日常生活について Sámi Lajos	文化
1868/12/06 *	Japáni könyvirodalom és kereskedelem	日本の文学と書籍売買について Sámi Lajos	文化
1869/05/02 *	Képek Japánból A yedoi buddha templom	仏教寺院の内部 Sámi Lajos	文化
1869/05/02 *	Képek Japánból A japáni fegzverei és hős Yoshitzone	日本の武器とヒーロー「義経」 Sámi Lajos	文化
1869/05/09 *	Képek Japánból Japáni nők	日本の女性 Sámi Lajos	文化・社会
1869/05/09 *	Képek Japánból Japáni ipara	日本の産業 Sámi Lajos	経済
1869/05/16 *	Képek Japánból Az orvosok Japánban	日本の医者 Sámi Lajos	文化
1869/05/16 *	Képek Japánból Énnkesek és bohócok Yedóban	日本の大道芸人 Sámi Lajos	文化

1871/10/22	A negyvenhét ronin	忠臣蔵	文化・歴史
1871/10/29	A negyvenhét ronin	忠臣蔵	文化・歴史
1871/11/05	A negyvenhét ronin	忠臣蔵	文化・歴史
1874/05/15 *	Japánról ipartörténeti szempontjáról	工業史から見た日本 Xántus János	経済・歴史
1874/05/22 *	Japánról ipartörténeti szempontjáról	工業史から見た日本 Xántus János	経済・歴史
1874/05/29 *	Japánról ipartörténeti szempontjáról	工業史から見た日本 Xántus János	経済・歴史
1875/05/23	Egy újjá született ország	日本事情	政治、文化
1875/08/29 *	Japán hajdan és most A japánok népünnepei	日本の祭日 Sámi Lajos	文化
1875/09/05 *	Japán hajdan és most “Róka-koma” Japánban	日本のきつね Sámi Lajos	文化
1875/09/12 *	Japán hajdan és most Szemfényvesztők, erőművészek és utcai komédiások	手品師、軽業師、大道芸人 Sámi Lajos	文化
1875/09/19 *	Japán hajdan és most Gyermeknevelés Tornászati Társasjátékok	子どもの育てかた、遊び Sámi Lajos	文化
1875/09/26 *	Japán hajdan és most Vallás és hitregészet	宗教と迷信 Sámi Lajos	社会・文化
1875/10/10 *	Japán hajdan és most Társadalmi osztályok és családi élet	社会階級と家庭生活 Sámi Lajos	社会
1875/11/07 *	Japán hajdan és most Piaczi és utcai élet Yedóban	日本の日常生活 Sámi Lajos	社会・経済
1875/11/14 *	Japán hajdan és most Szinészek és színházak	日本の俳優と劇場 Sámi Lajos	文化・芸術
1880/04/25	Japáni nők	日本の女性	社会
1880/04/25 *	Tanulmány a japáni művészetéről	Zichy Ágost の著作の書評 (Pulszky による)	文化・学術
1880/ *		Pulszky による美術評論	文化・学術
1881/06/12	A muletek és taliemánok	日本の占い	文化

1882/08/13 *	KHINÁBÓL HAZAFELEÉ	中国から太平洋経由で帰る ハンガリー人の投稿文	紀行文
1883/11/25 *	Japáni művészet	日本の芸術	文化・芸術
1884/01/20	Japáni Fesztészetről	日本の絵画	文化・芸術
1887/10/16	A japáni Hegyi Kristály	日本の鉱石	自然科学・
1891/01/25	A japán parlament megnyitása	日本の国会開設	政治
1891/06/07 *	Mikadó	日本の歴史 (Szemere Attilaによる)	政治・歴史
1891/06/07 *	AZ ASAKUSA TEMPLOM TOKIÓBAN	浅草	文化
1891/06/07	Japáni nők	日本の女性	社会
1894/02/11	Ferencz Ferdinand Főherceg Földkörüli Útja	皇太子世界一周旅行に関する 海軍士官の手紙	文化・歴史
1894/02/18	Ferencz Ferdinand Főherceg Földkörüli Útja	皇太子世界一周旅行に関する 海軍士官の手紙	文化・歴史
1894/02/18	Az ainók	アイヌについて	文化
1894/02/25	Ferencz Ferdinand Főherceg Földkörüli Útja	皇太子世界一周旅行に関する 海軍士官の手紙	文化・歴史
1894/03/04	Ferencz Ferdinand Főherceg Földkörüli Útja	皇太子世界一周旅行に関する 海軍士官の手紙	文化・歴史
1894/03/11	Ferencz Ferdinand Főherceg Földkörüli Útja	皇太子世界一周旅行に関する 海軍士官の手紙	文化・歴史

註1：1872年及び1888年1895年前半に関しては図書館でこの年のものが欠落していたため以上の中に含まれていない。また1894年はオーストリア・ハンガリー帝国皇太子フランツ・フェルディナンドの訪日と日清戦争勃発のためその記事はかなり多くなる。しかし、本発表の趣旨から判断してこれ以降のものは含めなかった。

註2：表中の\*は明らかに翻訳ではなくハンガリー人の筆によってかかれたものと判断されるものである。

註3：記事の「興味関心」の判定は発表者によるもの。日曜新聞自身の分類によれば日本関係記事はほとんどが Nép ismerettejesítés つまり「他の民族の国情紹介」とでも言うべき範疇に属している。

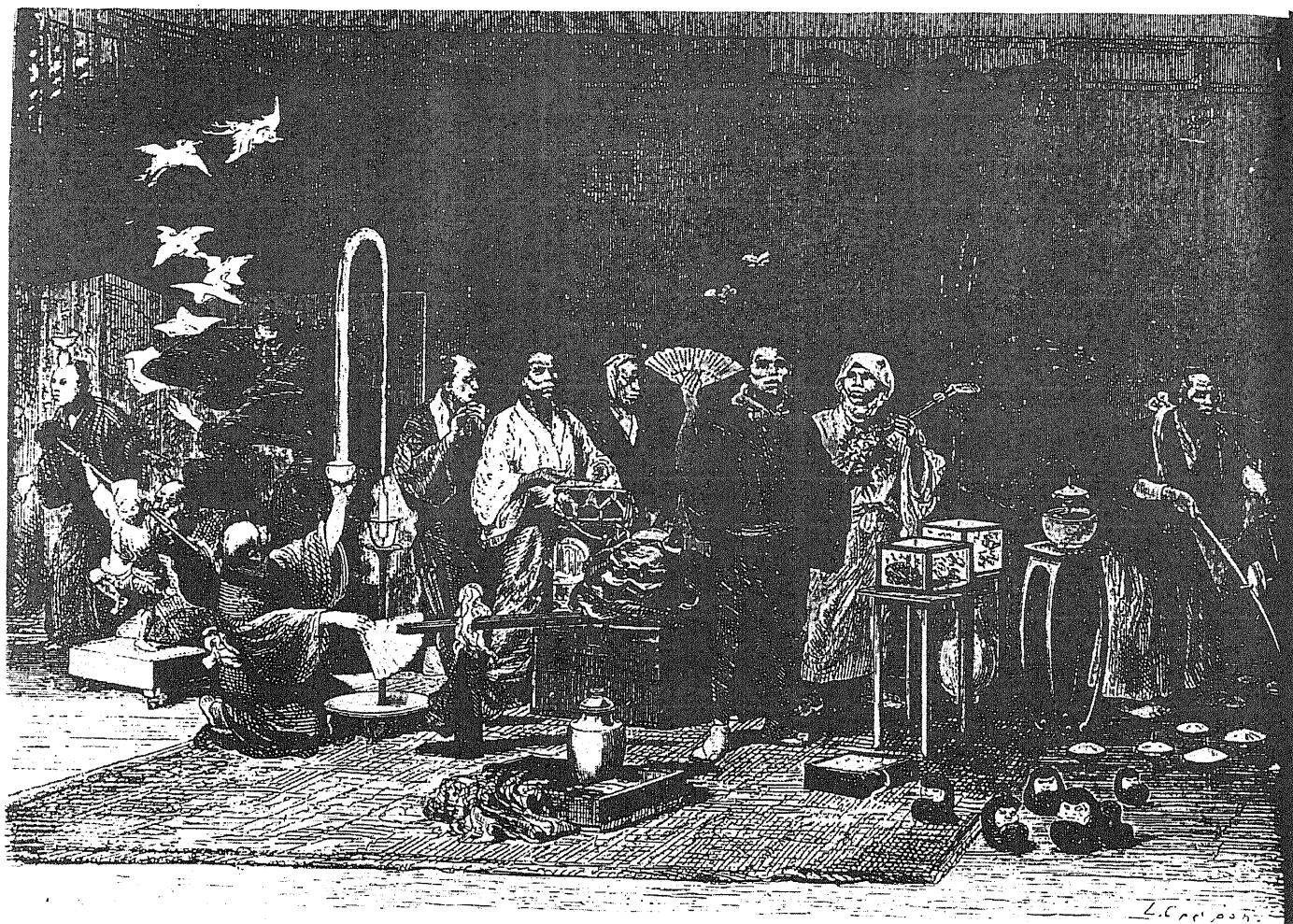


日本の本屋：1868年12月6日



日本の医者：1869年5月16日

手品師、軽業師：1875年9月12日



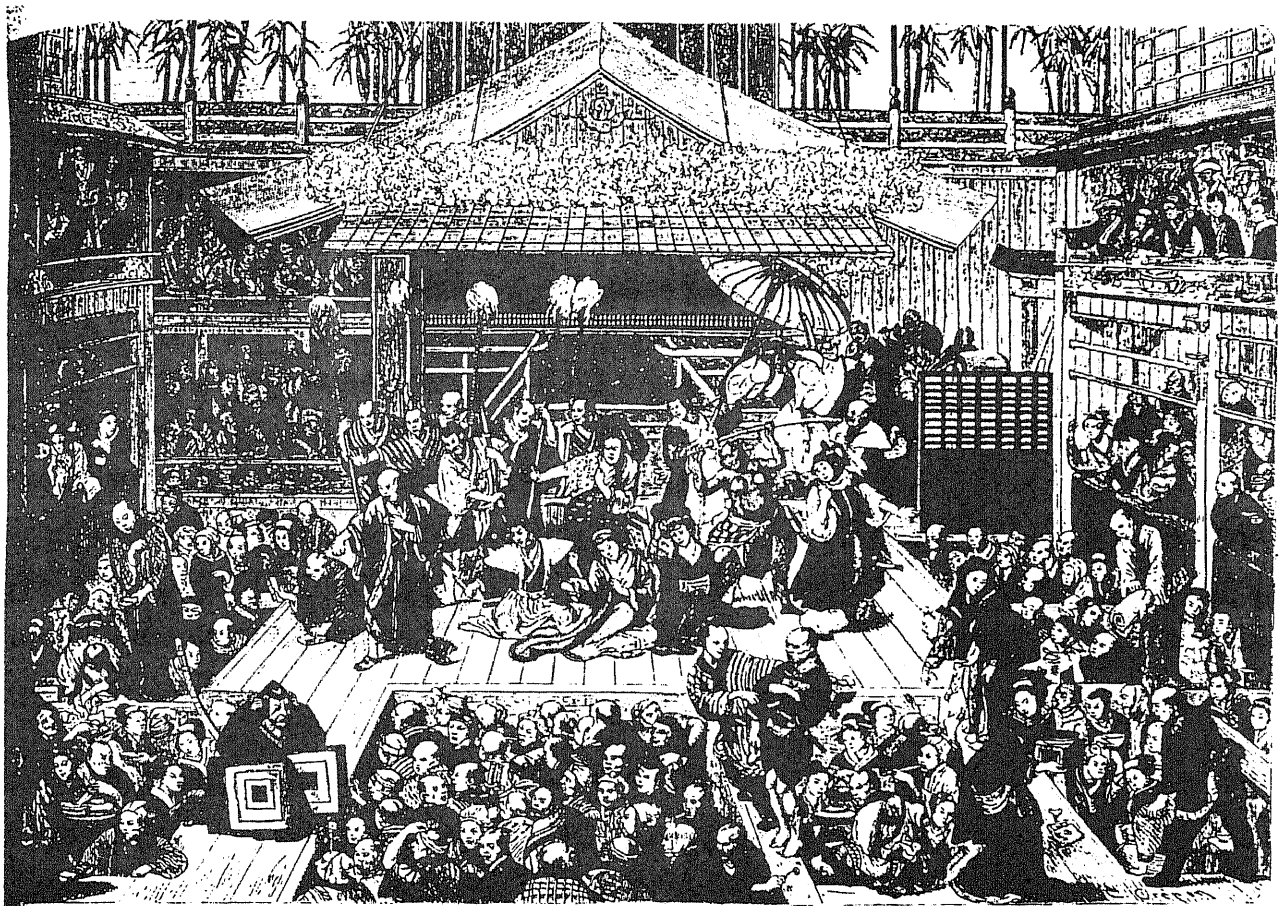
大道芸人：1875年9月12日

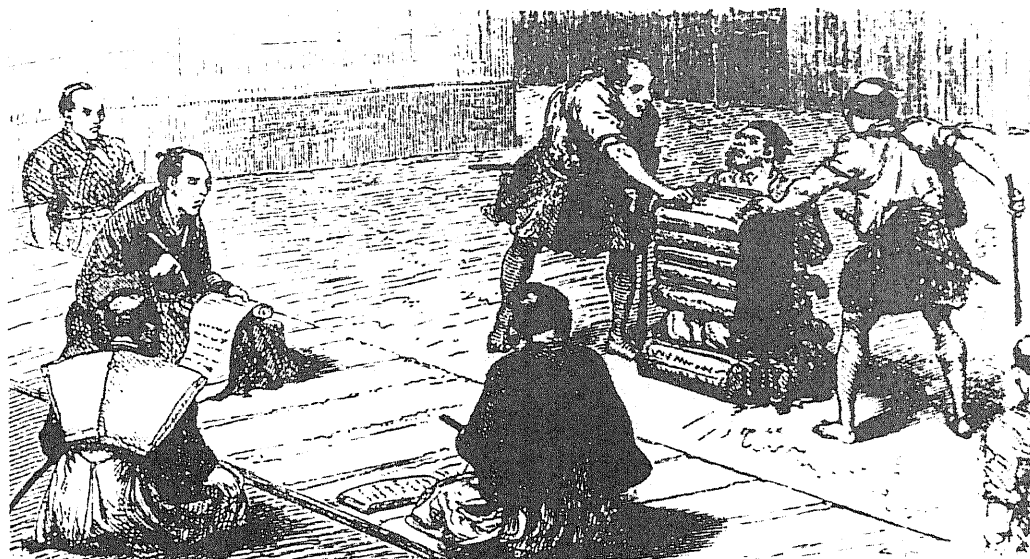




日本の祭日：1875年8月29日

日本の俳優と劇場：1875年11月14日

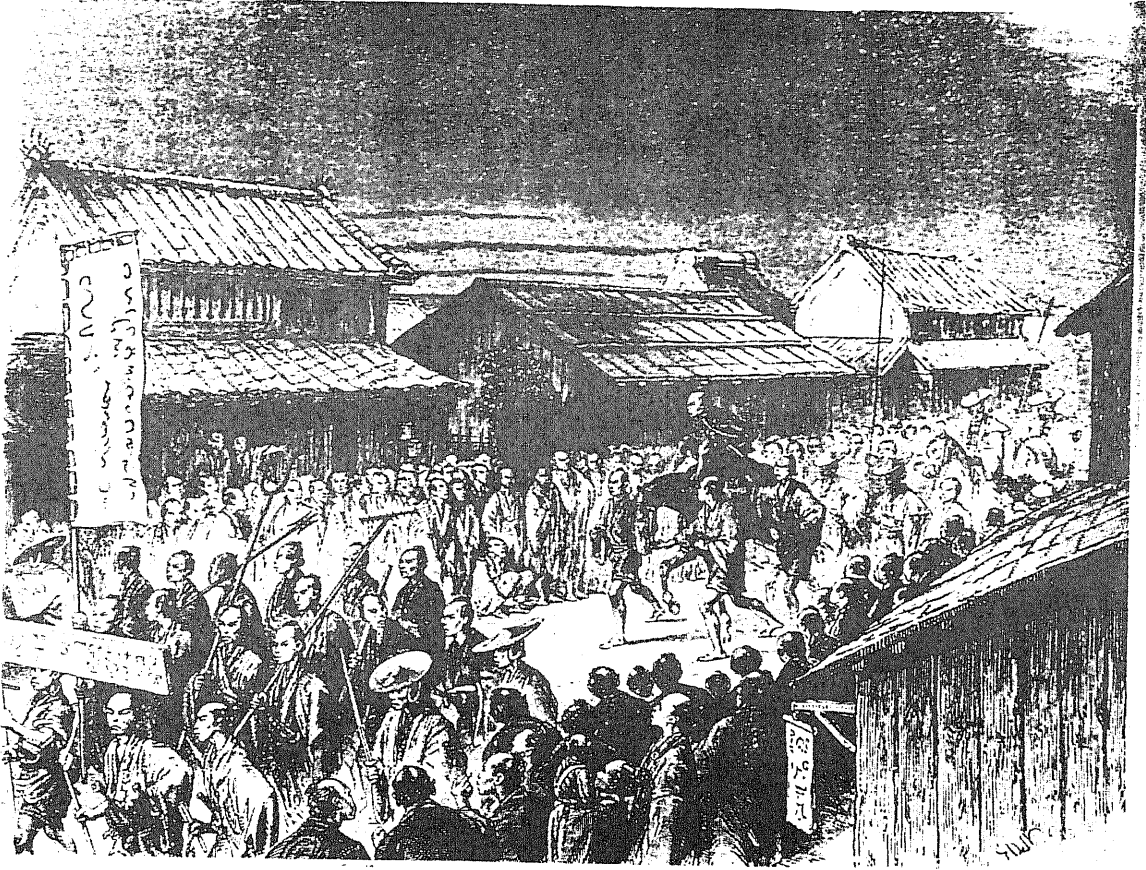




拷問



叩き



引き回し



斬首